

スリランカ

信仰の自由に関する 2007 年国際報告書

国務省民主主義・人権・労働局発行

憲法では、仏教に「第一の位置」が与えられているが、仏教は、国教として認められてはいない。憲法ではまた、その他の宗教の信者に、自由な信仰を实践する権利を与えている。政府は公にはこの権利を保証しているが、実際には、いくつかの地域で問題がある。

本報告書が対象とする期間中、政府による信仰の自由の尊重という状態には変化はなかった。

国会は、2004 年に初めて提出された反改宗法案について、まだ議決を行っていない。2004 年 5 月、ジャーティカ・ヘラ・ウルマヤ党（JHU）が、「非倫理的」改宗を有罪とする法案を国会に提出し、最高裁判所が、法案のいくつかの部分が違憲であると裁定を下したにもかかわらず、2005 年 5 月 6 日、JHU は、法案を二回目の審議に付した。その後、提案された法案は、特別国会委員会に付託され、委員会の初回の会合が 2006 年 4 月にもたれた。法案は、本報告書が対象とする期間の終了時点において、いまだ、委員会の検討下にあった。

2003 年後半以降、キリスト教会、牧師、信徒への攻撃が多数発生している。300 件以上の攻撃が 2003 年以降あったとされており、数十件が米国大使館によって確認されている。これに対して、主要な政治家や宗教家は公に攻撃を非難しており、警察は、事件と関連して約十数名を逮捕、起訴した。

仏教過激派、さらには強制的改宗の疑惑があることと反改宗法論争によって引き起こされた社会的緊張によって、キリスト教会への散発的な攻撃が起こった。

米国政府は、信仰の自由に関する問題を、人権促進という包括的な政策の一環で論じている。大使館関係者は、教会への攻撃に対する米国政府の懸念を政府指導者に伝え、犯人を逮捕、起訴するように促した。大使館関係者はまた、反改宗法が信仰の自由に及ぼすであろう好ましくない影響に対する懸念を、政府に対して表明した。米国政府は、引き続き、宗教指導者との間で、信仰の自由に関する問題全般について議論を行った。

第 1 節 宗教統計

スリランカの総面積は 6 万 5584 平方キロメートル、総人口は 1940 万人。仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教が信仰されている。人口の約 70%が仏教徒、15%がヒンズー教徒、8 パーセントがキリスト教徒、7 パーセントがイスラム教徒である。キリスト教徒は西部に集中する傾向にあり、東部はイスラム教徒が多くを占め、北部はほぼヒンズー教徒で占められている。

多数派のシンハラ人のほとんどは、上座部仏教徒である。最大の少数民族であるタミル人のほとんどは、ヒンズー教徒である。イスラム教徒のほとんどがスンニ派である。ボラー族の信者を含む少数のシーア派もいる。キリスト教徒のほぼ 80 パーセントがローマ・カトリックであり、英国国教会やその他の主流のプロテスタント教会も、都市部にある。セブンスデイ・アドベンティスト派、エホバの証人、メソジスト派、バプテスト派、オランダ改革派、英国国教会派、ペンテコステ派、アセンブリー・オブ・ゴッド教団もある。福音主義キリスト教徒も近年増えているが、信徒の数はまだ少数である。

第 2 節 信仰の自由の現状

法的・政策的枠組み

憲法では、仏教に「第一の位置」が与えられているが、その他の宗教の信徒が信仰を自由に実践する権利も与えられている。宗教問題省には四つの部があり、それぞれ、仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教の問題を扱っている。これらの部の権限を定義する法律によれば、各部は、宗教的価値観を説き、有徳の社会を促進する計画を作成し実効しなければならない。

2004 年 5 月、JHU は、「強制的改宗禁止」法案を国会に提出した。法案には、「非倫理的」改宗の罪で有罪とされた者、もしくはそれを幫助した者に対する罰金もしくは懲役を含む罰則が盛り込まれている。女性や子供を改宗させた場合には、罰則が重くなる。2004 年 8 月、最高裁は、法案の主要部分が違憲であると判断したが、強制的な改宗、詐欺による改宗、「誘惑」による改宗を有罪とする条項は支持した。2005 年 5 月 6 日、JHU は、同法案を修正せずに提出し、二回目の審議に付した。法案は、国会の常任委員会の検討に回された。常任委員会には、法案とそれに対して提案される修正を検討するための期間として、委員会編成後の 6 ヶ月間が与えられる。2006 年 4 月、国会議長が、常任委員会の委員を任命した。委員は、仏教徒 7 名、キリスト教徒 6 名、ヒンズー教徒 5 名、イスラム教徒 2 名からなる。報告期間の終了時点で、委員会は、宗教指導者および市民社会指導者からの証言を引き続き聞き取っていた。

憲法上では仏教が優位とされているにもかかわらず、その他の宗教における多数の主要な宗教的祝祭が、国民の祝日として祝われている。その中には、ヒンズー教のタイ・ポンガル（豊穡祭）、新年、ディーパワリ祭（光の祭）、イスラム教のハジ（聖地巡礼）、ラマダン（断食月）、預言者ムハンマドの誕生日、キリスト教の聖金曜日とクリスマスなどがある。

いくつかのキリスト教の教派は、宗教の問題に政府がこれ以上深く関与してくることに抵抗した。その結果、そうした教派は、国会の法律を通じて、もしくは国内法のもとで法人として登録することが許された。法人としての登録を希望する宗教の教派は、そのための書類を提出しなければならない。登録によって、教派に、金融および不動産取引における法人格としての身分が与えられる。こうした宗教団体には、税の免除はない。しかし、教会や寺院は、慈善団体として登録す

ることが許されており、そうすれば、税金が多少免除される権利を与えられた。「宗教団体」として登録をするという選択肢はなかった。

宗教は、公立学校の教育カリキュラムで必須科目となっている。両親と子供は、子供が、仏教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教のどれを学ぶのかを選択することができる。この他の宗教についての指導は行われていないため、他の宗教団体の信徒である生徒は、公立学校のシステムの外部での宗教指導を求めることになる。学校では、学術的な観点から、宗教を教える。すべての生徒は政府が行う全国的な試験を受けなければならないため、私立学校のほとんどでは、公立学校に似た教育カリキュラムを取り入れている。

離婚、子供の養育、遺産相続などの家族法に関連する事柄は、関係する民族集団または宗教集団の慣習法に従って裁決されていた。女性は 18 歳になれば結婚できるが、イスラム教徒の場合はそうではなく、女性であれば思春期に達したとき、男性であれば家族を養える経済力がついたときに、結婚できる年齢に達したとみなされる宗教上の慣習に依然として従っていた。

ひとつの宗教集団または民族集団の中で、個人により異なる法律手続きを適用するのは、女性差別につながることもある。

信仰の自由に対する制限

外国の聖職者はスリランカ国内で働くことができるが、過去三十数年間、政府は、一時的な労働許可の発行を制限してきた。労働の許可は、通例、政府に正式に登録された教派に制限されていた。国内の宗教関係の仕事に従事する者のほとんどは、国内出身の者であった。

政府は、一時的な在住許可を与える宗教関係の仕事に従事する外国人の数を制限した。

信仰の自由に対する侵害

1983 年以降、政府は、国内の少数民族タミル人の分離独立のために闘争しているテロリスト集団、タミル・イーラム解放の虎（LTTE）と戦ってきた。2001 年、政府と LTTE は、一方的な休戦をそれぞれに宣言し、2002 年には、共同停戦協定に合意した。2005 年後半、暴力の拡大を受けて、和平プロセスは停滞した。2006 年、二者間で、新たに戦闘が勃発した。この紛争において、宗教は重要な役割を担っていない。これは、言語的、民族的、政治的な差異に根ざしたものであるからだ。仏教徒、ヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒もみな、紛争の影響を受けており、1983 年以降、6 万人以上の人命が奪われた。軍は、主要な作戦を開始する前に公共のラジオを通じて警戒を呼びかけ、民間人は教会や寺院周辺の安全地帯に集まるように指示をした。戦闘時に宗教施設を巻き込んだ、または、戦闘地域を砲撃することで宗教施設を危険にさらしたということで、政府、準軍事組織、LTTE は非難を受けてきた。

報告期間中、北部と東部における礼拝施設にいる個人に対して人権の侵害が行われた。こうした事件は信仰の自由に影響を与えたが、宗教的な動機によるものではなく、紛争状況のために引き起こされたものであった。

2007 年 1 月 13 日、ジャフナのタミル伝道教会ナラサンビー・グナナシーラン牧師が、政府の治安部隊によって銃撃されて死亡した。治安部隊の兵士は、死亡した牧師の聖書、靴、オートバイを押収した。政府の役人は、牧師が治安部隊に手榴弾を投げつけようとしていたと主張したが、信徒らは、牧師は、断食と祈りの儀式を行うために教会へ向かう途中だったと主張した。牧師の殺害が宗教的な動機によるものだと示す証拠はなかった。

2006 年を通じて、紛争を原因とする失踪者の報告数が増加した。人道主義的な問題について発言をしたカトリックの司祭数名も、失踪者の中に含まれる。2006 年 8 月 20 日、チルチュチェルワン・ニハール・ジム・ブラウン神父と助手のウェンセスラス・ピンセス・ビマラスが、ジャフナ半島沖にあるカトリック優位の地区、カイツ島アライピディ村の近くにある治安部隊の検問所から、オートバイに乗った 6 人の武装した男たちに後をつけられ失踪した。2006 年 8 月 13 日、海軍と LTTE の間で戦闘が勃発し、15 名の民間人が死亡し、54 名以上が負傷した。このときブラウン神父は、セント・フィリップ・ネリ教会にいた。ヒューマン・ライツ・ウォッチは、ブラウン神父は海軍の高官から殺害の脅迫を受けていたと主張した。地元の新聞は、コロomboのラガマ総合病院で行われた DNA 鑑定の結果、2007 年 3 月 14 日にプングクドゥティーブ島近くで発見された、軍の砂嚢に詰められた切断された胴体が、ブラウン神父のものであると確認された、と報道した。しかし、2007 年 6 月、外務省は、DNA 鑑定の結果、死体はブラウン神父のものではないと確認された、と発表した。神父の殺害が宗教的な動機によるものであることを示す証拠はなかった。

2006 年 6 月 17 日、ペサライにて、政府軍がアワー・レディ・オブ・ビクトリー教会を襲撃し、政府と LTTE との間の交戦から避難しようと集まっていた、キリスト教徒とヒンズー教徒のタミル人を含む数百名の民間人に発砲したことに対する非難が起こった。

2006 年 5 月 6 日、北部にあるヒンズー教寺院から、8 人のタミル人男性が誘拐された。この事件も、おそらく政治的な動機によるものと思われる。この男性たちは、宗教的な祝祭のために寺院を装飾していたところだった。彼らの失踪は 2006 年 5 月 7 日に報告され、本報告書の対象期間の終了時点では、彼らの消息は不明のままだった。目撃者によると、5 月 7 日の早朝から寺院には陸軍兵士がおり、8 人が陸軍兵士によって連れ去られたところを見たという。誘拐された 8 人の男性の近親者は、ジャフナのヒューマン・ライツ・コミッションと、超法規的殺害に関する国連特別報告員、アムネスティ・インターナショナルに訴えたが、何の処置もとられなかった。

2005 年 12 月 24 日、親 LTTE のタミル国民連合（TNA）所属の国会議員であり、キリスト教徒のジョセフ・パララジャシンハムが、東部のバティカロアにある教会で真夜中のミサに出席中、暗殺された。この殺害は、政治的な動機によるものだろうと推測された。

警察は、訴えを受けて、キリスト教徒に対する攻撃や嫌がらせの多数の事件を調査した。時には、警察が、容疑者の刑事責任を問いたがらないことがあった。容疑者の中には、仏教僧が含まれていたりもした。法執行機関の当局者は、攻撃の大半は、少数の仏教過激派によって行われていると考えていた。

2003 年、セイロンのペンテコステ派使節団の一員であるモノハラン神父が、11 歳の少女の死亡に関連して逮捕された。病気にかかっていたこの少女に、モノハラン神父が祈祷を行っていた。神父は、犠牲者の両親とともに、「過失殺人」、すなわち、故殺（殺意なき殺人）にほぼ等しい罪の容疑で警察に拘引された。三人は、2006 年 6 月 2 日に保釈金によって釈放され、2006 年 7 月 28 日に審理が予定された。モノハラン神父は、2006 年 11 月に自然死した。地元の治安判事裁判所は訴訟を延期し、検察長官は、死亡した少女の両親を告訴しなかった。

2006 年 5 月、コロombo 郊外マハラガマのゴダガマ祈祷センターの牧師が、地元の仏教僧率いる暴徒から、礼拝を止めるよう脅迫された。牧師が警察に行くと、地域の人々が礼拝を望まないのなら止めるべきだと言われた。

宗教的な捕虜や抑留者の報告はなかった。

強制改宗

米国から拉致されたり不法に連れ去られたりした未成年の米国民などへの強制改宗が行われたという報告も、そうした国民の米国への帰国が拒否されたとの報告もなかった。

テロリスト組織による攻撃

LTTE は、1997 年以降、米国によって外国テロ組織と認定されている。イスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒すべてが LTTE の犠牲となっているが、宗教的な迫害が紛争の主要な要因とはなっていない。

1990 年、LTTE は、本島の北部にある土地から、約 46,000 人のイスラム教徒住民——事実上、住民のうちのイスラム教徒全員——を追い出した。これらの人々のほとんどは、その後も帰宅できず、福祉施設またはその周辺に暮らしていた。1997 年にジャフナ北部の町に帰ったイスラム教徒もいたが、LTTE から絶え間ない脅迫を受け、そこに留まらなかった。LTTE が、マナー地区から立ち退かされた数千人のイスラム教徒に、紛争が終わるまでは家に帰ってはならないと警

告した、という信憑性の高い報告があった。どうやら、LTTE のイスラム教徒に対する行動は、イスラム教信仰が原因となるものではなく、LTTE に好意的でない人間を北部および東部から一掃しようとする包括的な戦略の一部だったと思われる。LTTE は、イスラム教徒社会に対して和解の声明を出したが、多くのイスラム教徒はこの声明に懐疑的だった。LTTE は、いくつかの地区にいるイスラム教徒の国内避難民（IDPs）に、危害は加えないと説明し、自宅に帰るよう促し続けた。多少のイスラム教徒国内避難民は自宅に帰ったが、大半はそうはせず、LTTE が制圧する地域において政府による安全の保証が得られるまで待機することにした。2002 年の停戦協定以降も、LTTE は、東部で何度も攻撃を繰り返し、イスラム教徒の命も奪われた。本報告書が対象とする期間の終了時点では、こうした事件での逮捕者はいなかった。

2007 年 2 月、ヒンズー教の僧侶、セリア・パラメシュワラー・クルッカル・パラメシュワラが、東部のバティカロアの自宅から連れ去られ、殺害された、と BBC ニュースが報道した。ほんの数日前に、この僧侶は、ワカライの公開の儀式でラージャパクサ大統領に会い、ヒンズーの伝統に従って祝福を授けた。当地区で政府軍が LTTE 軍に破れた後に、政府の治安部隊がパラメシュワラをワカライに強制的に連れて行き、大統領を歓迎させた。LTTE は、この殺害の容疑をかけられた。殺害が宗教的な動機によるものであることを示す証拠はなかった。

2005 年 5 月 17 日、東部州トリンコマリーの公有地での仏像建設を巡って、LTTE 主導のストライキが行われる中、シンハラ人の家族に向かって手榴弾が投げられ、家族のうちの若者 1 人が死亡し、4 人が負傷した。2005 年 5 月 18 日、トリンコマリーの治安判事が、仏像を撤去するよう当局に指示した。2005 年 6 月 17 日、コロンボの控訴裁判所が、その命令の停止を言い渡した。2006 年 4 月 7 日、身元不明の男が、理由は明らかではないが、仏像を巡る LTTE 主導のストライキを組織していたウィグネスワラン氏を射殺した。本報告書が対象とする期間の終了時点では、抗争の起きた場所に仏像はまだ建っていた。

2005 年 4 月 24 日、バティカロアのアリヤンパシにあるアナパニヒンズー寺院の高僧が、寺院内の宗教儀式に出席している最中に、伝えられたところによると LTTE の武装一団によって銃で撃たれた。高僧と他の 2 名が重傷を負い、バティカロア病院に収容された。本報告書が対象とする期間中、警察は調査を続けていたが、この地域は LTTE が制圧しているために、それ以上の行動は取られなかった。

LTTE は、教会や寺院の構内を弾薬の保管を隠すために利用していると非難されていた。そうした場所は、政府が、抗戦勃発時に一般人が集まるよう指導しているところである。

第3節 社会的な虐待と差別

宗教の差異による差別は、民族的な差別よりもずっと少ない。一般的に、さまざまな宗教の信徒らは、互いの信条に対して寛容な傾向にある。改宗に反対する仏教過激派による、キリスト教徒への嫌がらせや、キリスト教徒の財物や礼拝施設への攻撃は、本報告書の対象となる期間中、継続的に起こっていた。別の宗派の指導者が、こうした攻撃を公に非難することもあった。イスラム教の少数派の教派のいくつかも、差別や嫌がらせ、礼拝施設や個人への脅しなどを、スリランカのイスラム教徒社会での多数派であるスンニ派から受けていた。警察はおおむね、要望に応じて、こうした集団の保護を行った。

2007年5月18日、ネゴンボにあるイスラム教のアフマディー教団が、スンニ派の教徒からモスクを乗っ取るとの脅迫を受けて、警察に保護を要請し、その保護のもと、金曜日の祈祷が無事に行われた。

2007年5月11日、スンニ派のイスラム教徒の集団がネゴンボのアフマディー教団のモスクに来て、アフマディー教団の信徒を締め出し、祈祷を行った。警察は現場にいたが、武力を用いてモスクの中の民衆を追い払いたくはなかったと報告した。

2006年10月、アフマディー教団は、スンニ派の集団が、少数派であるアフマディー教団員を背教者と非難し、教団員の宣伝を一切しないよう国営メディアに指示した、と報道した。アフマディー教団は、スンニ派の集団が2006年10月14日に教団員の一人を殺害したとされている件と、10月9日にネゴンボのパキスタン人アフマディー教団員を襲撃した件で、スンニ派集団を訴えた。地元警察は、報告期間中、これらの事件のいずれに対しても何も行動を起こさなかった。

本報告書の対象期間中、主流の教派および福音主義派の双方を含むキリスト教徒は、こうしたキリスト教派の脅威を受けていると信じ込み、改宗に反対する地元の仏教徒から、時折、嫌がらせを受けたり、財物や礼拝施設への物理的な攻撃を受けたりした。いくつかのキリスト教徒の集団は、時として、キリスト教徒に向けた嫌がらせや暴力を政府が暗黙のうちに見逃している、という苦情を訴えた。いくつかの場合では警察の対応が不適切で、地元警察当局者は、伝えられるところによれば、攻撃に関与した個人を告訴するのを好まなかった。

スリランカキリスト福音同盟(NCEASL)は、報告期間中に、キリスト教会、団体、宗教指導者、信徒に対する39件の攻撃があり、そのうちの90パーセントは警察に報告された、と発表した。これらの攻撃のうちのいくつかは、信頼性の高い情報源によって確認された。

「非倫理的」あるいは強制的な改宗にキリスト教徒が関与しているという仏教徒過激派による申し立ては、引き続き、この二つの社会の間に緊張をもたらしていた。キリスト教徒は、こうした非難を否定し、人々は自由意思によって改宗をしていると応じた。いくつかの福音主義集団が、

伝道中に、仏教について軽蔑的な発言をしたという報告もあった。また、キリスト教徒が精力的な改宗活動を行っており、広く見られる貧困や、戦争、教育の欠如などの社会病理を利用して、という申し立てがいくつかの集団からもなされた。キリスト教徒は、彼らの行っている救援活動の目的は、援助の受け手を改宗させることではない、と反論した。

2007 年 2 月 11 日、コロンボ地区のバンダラガマにあるキリスト教徒センターの信徒が日曜の朝の礼拝に参加していると、見知らぬ者たちが、祈祷中のホールに向けて石を投げ始めた。屋根板が損傷したが、負傷者は出なかった。それに先立つ 2006 年 12 月 10 日、ホールの窓が打ち破られ、壊された。12 月 24 日、キリスト教に反対するポスターが地区内に貼られた。教会は、教会への投石事件を、警察に訴えた。

2007 年 2 月 9 日、ポロナルフ地区の数ヶ所の地域で、何者かが車で巡回しながら、キリスト教徒を追ひ払う会合に参加するよう人々に拡声器で呼びかけている、という報告があった。その地域のキリスト教徒らは、会合が暴力的なものになるのではないかと、この懸念を表した。会合は、予定通り、ポロナルフの街区にある仏教寺院で開かれ、約 150 人が出席した。暴力に発展しないように、警察が出動した。しかし、会合の出席者は、キリスト教の聖職者に、辞任と、この地域でのキリスト教の活動を停止するように強く求めることを決定し、さもなければ、「抗議運動の主催者にも責任がとれないような結果に直面する」だろうと言った。

2007 年 1 月、最高裁判所は、外国から仏陀の攻撃的なイメージが輸入されている疑いがあるという、コロンボの仏教寺院の高僧から出されている基本的権利の侵害の訴えに対する決定を遅らせる選択をした。訴えでは、警察の監察長官、関税局長官、法務長官、外務省を、被告としていた。最高裁は、この訴えにいつ裁定を下すかは、述べなかった。

2006 年 12 月 17 日、デブ・ニワサ（神の家）教会の牧師が建設中の自宅で就寝中、5 人の男が押し入り、牧師を襲撃した。男たちは、電気の接続と、オートバイ、その他の所持品を破壊した。それから家に火をつけ、牧師を車に押し込んだ。車で連れ去り、キリスト教の牧師を止めろと罵り殴打した。少し離れた場所で、牧師は車から放り出された。牧師は、2006 年 12 月 18 日にゴカレラ警察署に訴え出たが、報告期間の終了時点では逮捕者は出ていなかった。牧師は、殴打のために視力が損なわれた、と報告している。

2006 年 12 月 7 日、イスラム教のスーフィー教団、全島タリカスル・ムフィヒーン（AITM）の指導者、M.S. アブドゥラ・パイルワーンの葬儀がモスクで行われ、これがきっかけとなり、バティカロア地区のカッタングディにおいて、他のイスラム教派との間で暴力衝突が 9 日間続いた。カッタングディ・ジャミヤスル・ウレマ（神学者委員会）は、スーフィー教団が、死亡した指導者に対し、ムルサス（非イスラム教徒的）の命令に従い、非正統的な宗教的実践を説き、汎神論を促進したと発言した。イスラム教徒の裁判官は、パイルワーンの埋葬について取り調べを

行い、遺体を発掘し公共のイスラム教徒の墓地に埋葬するように命令した。裁判官はまた、建築物の高さの制限に違反しているため、スーフィー教団の祈祷センターの塔を取り壊すよう警察に指示した。判決の後、スンニ派イスラム教徒の一団がスーフィー教団のモスクを襲い、AITMの会員2人を殺害し、さらに多数を負傷させ、数千ドルに値する政府および民間の財物を損壊した。紛争を解決するために、AITMは、指導者の遺体を発掘し、公共の墓地に埋葬した。

2006年11月22日、キャンディ地区のガンボラ、マワツラにあるライトハウス教会を身元不明の人物らが爆破し、教会の使用人が負傷した。岩が正面の窓を壊し、屋根から外に飛び出た。使用人は、地元の病院に急遽運ばれ、治療を受けた。牧師は、警察に訴えた。

2006年11月12日、プッタラム地区のアナマドゥワで、祈りの塔教会の4人の信徒が、葬儀から帰宅する途中、数名の男に声をかけられ、殴打され投石された。教会の牧師が事件を警察に届けると、犯人らは、礼拝の音が大きく近隣に迷惑をかけていると教会を非難した。牧師は、近隣住民の多くはキリスト教徒で、礼拝は1週間に1時間しかない、と反論した。警察は牧師に代わり犯人らに聞き取りを行い、犯人らは、教会の信徒に再び嫌がらせをしないと約束した。

2006年11月12日、ナワラピティヤのミズパ祈祷聖職者連の信徒が礼拝に集まっていたところ、暴徒が儀式を妨害し、儀式をすぐに中止するよう要求した。暴徒には、仏教僧12名、地元の役人1名、地元新聞の記者2名が含まれていて、信徒を追い払った。暴徒は、牧師を殺すと脅迫した。この暴徒は、後に再び教会に来て、使用人たちを脅迫した。暴徒の1人は、教会の使用人1人を棍棒で殴り、その他の暴徒は椅子を壊した。教会は、地元警察に正式に訴えた。報告期間中、警察はだれも逮捕していなかった。

2006年11月8日東部の町カッタクディ、バドゥリヤにあるアル・ジュンマモスクに、ライフル銃をもった身元不明の一団がワゴン車で乗り付け、事務所を襲撃した。一団は、事務所内の人々に無差別に銃を発射し、6人が負傷した。カッタクディの警察は、同モスクで以前にも衝突があったことから、地域内のイスラム教徒の二つの派閥間での未解決の論争が原因による狙撃であると考えた。

2006年10月30日、マタラ、ポルヘナのランカにあるカルバリー・チャペルの牧師に、地元の男の一団が声をかけた。他の男たちが傍観する中、2、3人が牧師を殴打した。牧師は負傷し、入院した。牧師は、マタラの警察に訴えた。

2006年10月29日、ガンパハ地区ヤッカラで、アセンブリー・オブ・ゴッド教会の信徒が、礼拝に集まった。4人の地元の仏教僧を含む約50人の仏教徒の集団が礼拝に現れ、中止を求めた。僧たちは、仏教徒の村にキリスト教会は必要ない、と牧師に言った。暴力沙汰にならないように、牧師は、その週の礼拝を取りやめることに合意した。暴徒は、教会を永久に閉鎖するよう要求し、さもなければ深刻な事態になると言った。牧師は警察に訴え、警察は信徒を保護することに同意

した。ところが、11月12日、日曜日、暴徒が再び、教会へと続く路上に集まった。反キリスト教徒のポスターが貼られ、100人以上の仏教徒が、そのうちの何人かは棍棒を手にし、キリスト教徒が礼拝に参加するのを妨害し、抗議をした。牧師は警察に電話したが、やってきた警官は2人だけで、群衆を制圧できなかった。警察は、応援を呼び、最終的には暴徒を追い払った。11月13日、1人の男性が、牧師の家を訪れようとしていた若い女性に黒油の容器を投げつけた。この女性は、ガンパハの警察に訴えた。

2006年10月23日、クルネーガラのゴナウェラにあるバインヤード・コミュニティ教会の使用人とその家族が、警官と名乗る5人の男に襲撃された。男たちは家族を脅し、使用人を棍棒で打ち、子供を激しくゆさぶった。男たちはまた、金の首飾りを盗み、建物の電力供給を破壊し、壺や花瓶を粉々に壊した。棍棒で打たれた男性は、身体の内部に重傷を負った。10月30日、再び10人の男がバインヤード・コミュニティ教会を襲撃した。男たちは建物に放火しようとしたが失敗した。今回の襲撃では、負傷者は出なかった。教会の会員らは、パンナラの警察に訴えたが、報告期間中には、逮捕者は出ていなかった。

スリランカキリスト福音同盟（NCEASL）は、2006年10月13日、ポロンナルワのヒングラクゴダにある祈祷センターが破壊され、放火されたと報告した。身元不明の加害者は、キーボード、カーペット、マットを盗み、排泄物で建物の内部を汚し、その後、聖書と賛美歌集に火をつけた。牧師は警察に訴え、警察は調査中であった。

2006年10月、匿名の集団が、コロンボにあるほとんどのカトリックとキリスト教の学校に脅迫文を送り、すべてのクリスマスの計画を取りやめるよう要求した。この集団は、子供を保護する組織と名乗った。いくつかの学校は、クリスマスの計画を実行した学校には厳しい措置がとられるだろうと警告する匿名の電話を受けた、と報告した。あるカトリックの学校に宛てた脅迫文には、子供たちはクリスマスの行事をあきらめ、その代わりに北部と東部で任務についている治安部隊に金を寄付すべきだ、と書かれていた。学校は、こうした脅迫にかかわらずクリスマスの計画を実行し、その反動は何もなかった。

2006年8月、カドゥガンナワのバラナで、オランダ改革教会に地元孤児院の修復事業を止めるようにと要求するポスターが出回り始めた。NCEASLによれば、約200人が孤児院の構内に押し入り、財物を破壊しにかかった。仏教徒の旗が屋根に掲げられた。2006年9月、地区評議会は、修復事業のために発行していた免許を、正当な理由を示さずに廃止した。教会の会員は、地元の警察に訴えた。

2006年7月1日、ラトナプラ地区、ハプガステンにあるハーベスト国際教会を暴徒が襲撃した。暴徒は、財物を打ち碎き略奪し、教会の使用人2人に重傷を負わせた。そのうちの1人の傷は、簡単な手術を要するものだった。暴徒は、牧師とその家族に、教会を閉鎖しなければ殺すと脅迫

した。牧師は、地元の警察に訴え、警察は事件を調査中であるが、本報告書の期間の終了時点では、逮捕者は出ていなかった。

2006 年 6 月、スリランカの民間団体、全セイロン仏教徒会議（ACBC）が、仏教徒をほかの宗教に改宗させるための戦略と財源について報告するための調査委員会を任命した。ACBC の役員は、2007 年末までに報告書を発表する意向である。

2006 年 5 月、キャンディ、ガンボラの、フォースクエア・ゴスペル教会の牧師が、殺すと脅迫された。その後まもなく、地元の社会福祉職員と、仏教僧 3 人が、牧師に、警察署まで同行するように主張した。警察署で、牧師は、公式の身分証明書と、教会の設立法のコピーを見せた。警官は、社会福祉職員と、仏教僧に、牧師への嫌がらせをこれ以上しないよう強く言い渡した。しかし、牧師が、殺すと脅迫されたことに対する公式の訴えのコピーを求めると、警官は返答しなかった。コロンボにあるフォースクエア・ゴスペル教会の本部が、この件を地元警察の担当者に抗議すると、牧師の訴えの記録がないとの連絡がきた。牧師は、ガンボラで集会を続けることは危険すぎると考え、報告期間中、信徒らは別の場所で集会をもっていた。

2006 年 5 月 2 日、統一クリスチャン・フェローシップが、ゴール地区のポッターに購入した土地に、コミュニティ・ホールの建設を始めた。2006 年 5 月 6 日、仏教僧に率いられた暴徒が、敷地内に入り、建設労働者と牧師を脅迫した。労働者は襟首を捕まれ、労働者と牧師に罵声が浴びせられた。牧師が建物はコミュニティ・センターなのだと説明しても、暴徒は、建物を取り壊せと要求し、もしも教会が建設されたら火をつけると脅迫した。牧師は、この事件を地元の警察に報告した。建設は中止され、再開されなかった。脅迫は、報告期間中も続き、建築は再開されなかった。

2006 年 4 月 23 日、ピリヤンダラのメソジスト教会が、2003 年に仏教僧の脅迫によって教会の閉鎖に追い込まれて以来、初めて再開された。再開時、前回と同じ仏教僧の集団が暴徒を率い、信徒らの乗り物に損傷を与えた。2006 年 4 月 30 日、教会の外の道路に、火のついたタイヤが置かれた。法廷の審問が、2006 年 6 月 16 日に設定された。法廷が三回開かれた後、治安判事は、注意を与え、両者を解散させた。財物と乗り物を失った信徒らは、補償を求めるための別の訴訟を起こした。教会は、数名の地元仏教僧が率いる村民の集団が妨害を続けているために、もはや機能していない。

2006 年 2 月 14 日、アルピティアの牧師が警察署に召喚された。署では、5 人の仏教僧を含む約 80 人が、非倫理的な改宗を行っているとして牧師を非難した。牧師は、祈祷のために信徒を集めてはならないと言いつけられた。暴徒は、警官の目の前で牧師を脅迫し、傘で牧師を突いた。その日のうちに、暴徒は、牧師の家の襲撃を試みた。牧師は、妻と子供を連れて逃げ、警官に通告した。到着した警官が、暴徒を追い払った。2006 年の 2 月一杯、牧師は、殺害の脅迫や、牧師

やその家族を助けた者を脅迫するポスターによる宣伝活動といった嫌がらせを受け続けた。牧師のもとを訪れた信徒も嫌がらせを受けた。2006 年 3 月、先頃の緊迫した状況の間、脅迫を受けていた牧師とその家族をかくまっていた家族が、燃える油と排泄物が自宅めがけて投げつけられているのに気づいた。2006 年 3 月 22 日、同家族が、子供の病気の原因を調べたところ、自宅の井戸に種と燃やした油がぼたぼたと入れられ汚染されているのを発見した。この家族は、警察に訴えた。信徒らはもう集会を開いておらず、牧師は礼拝を行っていない。警察の取り調べの結果、逮捕者は出なかった。警察は、信徒らに集会を止めるように忠告し、教会はもはや機能していない。

2006 年 1 月 22 日、ガンパハ地区のボラスサで、教会に出かける人々が、仏教僧やカトリックの司祭を含む大勢の暴徒に遭遇した。暴徒は、プラカードを持ち、教会の礼拝の中止を要求する脅迫の言葉を叫んでいた。暴徒は、牧師は自分の村のキリスト教徒しか教会へ受け入れてはならないと主張し、牧師は強迫されてこれを認めた。2006 年 1 月 23 日、牧師の家に石が投げられた。2006 年 2 月 12 日、暴徒は、教会の出席者を調べ、オルガン奏者が隣の村から来ていることを知った。暴徒の脅迫が増し、牧師は警官を呼んだ。警官は群衆を追い払ったが、牧師に、自分の村の信徒だけを対象に礼拝するよう忠告した。牧師はそれ以降、定例の日曜の礼拝を行っていない。本報告の期間中、牧師と信徒は、別の場所で集まり礼拝を行っていた。

2005 年 12 月 25 日、クルネーガラ地区、アラッワのキングス・リバイバル教会の教区民が、礼拝に出かける途中、襲撃され、4 人が負傷した。襲撃の知らせを受けた警官がただちに現場に駆けつけ、暴徒を追い払った。襲撃の直後、牧師の飲料水用井戸に油が投げ入れられ、2006 年 1 月 16 日には、襲撃した者たちが、牧師の家に石を投げ、窓を割った。2007 年 1 月 26 日、法廷は、教会に有利な裁定を下し、教会は、引き続き同じ場所で機能している。

2005 年 6 月 5 日の夕方、ゴール地区、アムバランゴダにあるアセンブリー・オブ・ゴッド教会の牧師が新しく購入した家に、村民が瓶を投げつけた。6 月 6 日、約 30 人の暴徒と、牧師との間で論争があった後、暴徒は牧師の家を攻撃し、窓と柵を壊した。その後、暴徒の数は 50 人以上に増え、牧師とその弟を襲い、牧師の携帯電話と、2,000 ドル（20 万ルピー）以上を盗んだ。家も破壊され、敷地には、仏像と灯火が置かれた。警察は事件を調査し、仏像と灯火をすぐに撤去し、6 人を逮捕した。逮捕者は、本報告書の対象期間の終了時点には、保釈金で保釈されていた。最初の審問は 2006 年 1 月に開かれた。牧師は、その後も石が家に投げられ、コミュニティ・センターとして使おうとしていた建物を村民が占拠し、牧師に使用させないようにしている、と報告した。告発された側が牧師に近づき、仕事を平穩に続けられるようにすると約束し、法廷の外で解決しようと持ちかけた。牧師は、どのような解決も、治安判事の前で合意され、法廷で記録されるようにしたいと述べた。2007 年 4 月 27 日、裁判官は、コミュニティ・センターとなる予定の家屋を不法に占拠する者に対して、そこを明け渡し、建てた柵を撤去するように命令し

た。しかし、牧師は、まだ恐怖心が強いため、違法居住者から土地を取り戻すことができていない、と報告した。

2004 年 12 月、クトゥワナにあるセント・マイケル教会が放火された。これは、2003 年以降、教会が受けた 3 度目の攻撃である。警察は、本報告書が対象とする期間中、だれも逮捕しなかった。報告期間中、警察は、修復した教会の建物で礼拝に集う信徒らの警護をした。

2004 年、クルネーガラ使徒教会を大勢の群衆が襲撃した。教会と、教会の使用人の宿舎が焼け落ちた。5 人の男が逮捕されたが、本報告書が対象とする期間の終了時点では、釈放金によって釈放されていた。この事件の審問は、2005 年 7 月に予定された。攻撃した側は、法廷外での解決を求めた。教会は、攻撃した側がこの事件の責任を認めるならば、和解に応じようと合意した。教会はまた、損害の補償を求めて民事訴訟を起こした。審問が何回か延期されたが、次の審問は、2007 年 5 月に予定された。

第 4 節 米国政府の政策

米国政府は、人権を促進する総合的な政策の一環として、スリランカ政府と、信仰の自由に関する問題について議論している。米国大使館の職員は、全国の宗教団体の代表と定期的に会い、広範にわたる人権、民族、信仰の自由に関する懸念事項を検討している。本報告書が対象とする期間中、大使館の代表は、スリランカ政府高官と会い、キリスト教会への攻撃についての米国政府の懸念を表明し、反改宗問題について議論した。民主主義・人権・労働局次官補と、国際的な信仰の自由についての特使が、駐米スリランカ大使と、反改宗問題について幾度も議論した。

米国政府は、紛争を政治的に解決する強力な支援を行っている。さらに、米国大使館は、紛争の平和的な解決を促進するための、宗教指導者による異宗派間の努力を支援する。

2007 年 9 月 14 日発行